

「靴^{げた}? 履?」 パートⅡ

——日常生活で発見できる日本文化とドイツ文化の違い——

ドレーヴス アンゲラ

上記の表題を初めてご覧になった時、「随分難しい字を使っていますね。それに、パートⅡとは、どういうことだろうかしら。」と思われたかも知れません。実を申しますと、『靴?履?』という元の題は、私の作った物ではなく、森鷗外に貸してもらった題なのです。下駄か靴か、その疑問に基づいて、鷗外が一生懸命に論じた文章が存在します。なるべく日本とドイツの文化の違いに関して述べるようにと、ある口頭発表¹⁾のことを依頼された時、私は、まだ学生の頃、面白いと思った、その鷗外の文章のことを思い出してしまいました。『靴?履?』という鷗外の作品は、明治22年(1889)5月25日発行の『衛生新誌』(鷗外自身が同年創刊した医学雑誌)、第三号の「論説」欄に「医学士森林太郎」の署名で掲載されました。²⁾「さて」や「嗚呼」さえ含んでいる、「です」・「ます」体で書かれた文章を見ますと、それが元々論文ではなく、口頭発表用の原稿をそのまま雑誌に載せた印象があります。この作品は、ドイツの地質学者エドムント・ナウマンに対しての鷗外の復讐でもあると思います。ナウマンは1886年、日本列島の住民と文化に関して新聞記事を発表しました。³⁾ それに対する鷗外の反論となっている新聞記事⁴⁾によりますと、ナウマン

1) この文章は、2000年6月27日、鹿児島日独協会の第132回例会のために作った原稿にかなり加筆したものです。

2) 『鷗外全集』、岩波書店 1974年、第29巻、592頁参照

3) Edmund Naumann: „Land und Volk der japanischen Inselkette“, (Allgemeine Zeitung, Nr. 360, Beilage I, 29.6.1886)

4) 「Die Wahrheit über Japan」, 森鷗外著 (Allgemeine Zeitung Nr.360, 29.12.1886), 『鷗外全集』に収録、岩波書店 1974年、第26巻、3-12頁 (=620-611頁)

の記事は、生半可な知識に基づいている上に、いろいろと変な先入観に囚われた、無礼とさえ言えるものであったに違いありません。丁度その頃ドイツに留学滞在していた鷗外が怒りに満ちた反論を同じ新聞に発表し、その中で予定として、ナウマンの衣類などについての不可解で間違っている発言に関しては、別のところでじっくりと論じるつもりだと、既に告知しています。⁵⁾『靴?履?』という作品はその予定を実行したものと思われる。

その中で鷗外は極まじめに、下駄の優秀性と靴の欠点について論じており、読み手は靴のことがいやで恐くさえなっても、おかしくありません。ところで、私は下駄が大好きで、いろいろな機会に履いております。それもあって、今回はとにかく、ご覧の様に、その鷗外の文章の題を拝借させていただきます。

初めて日本に来た時、特に気になった現象の一つは、日本の行動方式が大体集団的だ、という印象でした。会社や学校の制服、幼稚園児のかぶっている帽子などや、若者の流行のあり方なども、不思議だと思いました。もちろん、ドイツの若者達の間でも、何かが非常にはやってしまうことはよくありますが、流行の中にも、個人的な自由の幅があり、皆が皆、全く同じ格好をすることはありませんし、ある人が他の人と同じ格好であることもめったにありません。それは、ドイツ人の個性にこだわっている考え方に基づいています。つまり、誰にも自分だけの趣味や性格などがあり、自分だけに似合うまたは似合わない洋服などがあるという考え方です。そういう訳で、私が初めて日本に来た時は、例えば、髪の毛をわざわざ目立つために染めたのだらうに、若者が、個人を全然区別できない、茶パツ集団として走り回っていることに驚きました。他の例を挙げますと、あの時、若い女性のほとんど誰でも、同じ色の口紅を付けていたことにも、びっくり致しました。

あの頃の日本人の友達の一人と、それを相談してみました。しかし、「なん

⁵⁾ 「Die Wahrheit über Japan」, 森鷗外著 (Allgemeine Zeitung Nr.360, 29.12.1886), 『鷗外全集』に収録, 岩波書店 1974年, 第26巻, 5頁 (=618頁)参照

で皆が同じでなくちゃいけないの。」と尋ねますと、友達は「じゃあ、なんで皆が同じじゃ、いけないの。なんで一人一人が皆と違わなくちゃ、ならないの。」と答えました。そこで私は「例えば、ねえ、皆と同じ格好をして、つまらないんじゃないですか。」と言いましたが、友達の答えは「それはつまらないと思っただことがないよ。却って、ねえ、自分だけが目立つと、とても面白くないと思います。」ということでした。

あの時から既に随分時間が立ってしまいました。外国からの影響でしょうか、とにかく最近では、日本の多くの若者がもっと自分の個性を生かそうとしているような気がします。しかし、例えば、コギャル現象の様な極端な流行にせよ、人気タレントを真似たヘアスタイルにせよ、今丁度はやっている極めて厚い底のサンダルと膝に近い位置まで裏返したジーンズにせよ、日本の若者の大勢にとっては今でも、人目を引く格好をする時は、やっぱり集団で目立つ方が心地良さそうに見えます。つまりそれは、目立つと言っても、他の人と違う格好をすることではなく、ただただ派手な格好を安心できる集団の中で楽しむことだと言えるでしょう。ところで、ドイツ人は目立つことが好きだということも誤解です。目立つことと自分の個性を生かすことは違うからです。そして、一人ずつが他の人達と違いますと、つまり皆が一人ずつ違いますので、それだけでは、別に目立つことにはなりません。

多くの日本人が方言を見下したり、恥ずかしく思ったりすることは、私はおかしいと思っています。私は、ドイツの標準語が話されているニーダーザクセン州に生まれて育ちましたので、ドイツ語で話す時、自然に標準語が出て来ることが、ドイツ語を担当する教官になってから、当然ながら、役に立っていますが、好きな訛りがいろいろあり、その訛りでちゃんとしゃべられないことが、残念だと思います。方言の中には、面白くて力強いインパクトのある表現がたくさん見つけられます。古典の言葉と隣の国の影響が方言だけに残っていることもよくあります。その様な表現は標準語には存在しないので、方言の語彙が特別な豊かさを持っていると言えます。ご存知の通り、標準語には残念ながら、

マスメディアが使い過ぎるせいもあって、単純で浅くなる傾向があります。最近その現象がドイツでも日本でも注目や批判を集めており、ドイツ語で「Sprachverarmung」(=言葉の貧困化)とも言われます。それは、元々方言の一つであった標準語に基づいている言葉が、標準語に選ばれてから、いろいろな違う言葉を使っている人々の一般的な通用語になりつつ、それによって元の地方の住民の話し方に昔から根ざしている活力をますます失って行き、段々人工的な言葉になってしまうことから起こる現象です。そういう訳でも、方言を大事にすべきだと私は思います。方言は、ある地方ですっと発展してきた言葉として、特に地元の歴史、その文化を通して、その風土と気候にも、深く関連しています。そういう訳で、方言は力強く豊かで生き生きしています。段々その様な意識が失われてしまう標準語になった言葉より、日常生活で地元の人々に使われている限り、方言ではその豊かさが生き続けることができます。標準語では、同時に、ある地方の方言として取り敢えず元々の豊かさが残り続けても、毎日朝からずっと続くマスメディアの強い影響で、本来の地元の人々の話し方さえ変わり始めます。標準語は何処でも通じる通用語として便利ですが、表現や言葉全体の豊かさのために、マスメディアの言葉ばかりではなく、地元の人々の話し方、つまり生きている方言をよりよく知る方が、普段標準語で話している人にとっても、絶対に良いと私は思います。

「お茶か紅茶かコーヒか、何にしますか。」と聞かれて、「何でも結構です。」と言うのが日本での常識ですが、その単純な日常生活の場面が、日本とドイツの常識では、随分異なることもあると証明しています。「何でも良い。」というのは、ドイツ語では「Das ist mir egal.」なので、さっきの話しがドイツ語であったとすれば、「Was möchten Sie trinken?」の答えとしては、却って常識外れ、つまり無礼だと言えます。日本語の「何でも良い。」というのは、相手の都合に合わせる意志と相手に対しての信頼を表しますが、ドイツ語の「Das ist mir egal.」は単なる無関心を表します。ご覧の通り、文化の違いのせいで、ある表現をそのまま直訳しますと、その意義が全く変わることがあります。ドイツ人

であるホストの視点から見ますと、ホストがわざわざ、お客さんがなるべく好み通りで自由に選べるように、色々な物を用意したのに、「何でも良い。」の翻訳語としての「Das ist mir egal.」という発言は、控え目で丁寧ではなく、却って随分失礼なので、絶対に避けた方が良いでしょう。選び方で失敗を恐れている場合には、直接に「Was haben Sie denn? 何がありますか。」とか「Was trinken Sie denn? あなたは何にしますか。」と聞けば、良いでしょう。とにもかくにも、ドイツ人であるホストは、お客さんが遠慮なく自分の好みを表してくれますと、安心しますし、嬉しく思います。しかし、逆に言いますと、日本では、ホストがせっかく特別な物を用意して下さったのに、お客さんが勝手に、ホストが普段に飲んでいるお茶を飲みたいとか、或は、勝手に例えばホストの苦手な紅茶、またはホストの嫌いなコーヒーが欲しいと言い出すのは絶対に止めた方が、可愛がって頂けると言えますね。

私は、日本人である知り合いに次の通りに言われたことがあります。「ドイツ人にはね、皆一緒に出かけた時、請求書が出たところで、いつも最後の一円まで、きちんと分け合う習慣がありますね。日本人は普通それまでやらない。日本では、大体で良いと思われるからですね。日本人は、そこまで正確にお金を分け合うのは、ちょっと寂しいと思います。」

面白い発言だと思いました。なぜなら、ドイツ人にとっては、自分の分をきちんと払うことが当たり前だからです。もちろん、友達が例えば「良いから、良いから、奢りますよ。」という様な場合は別です。そして当然ながら、お金を充分に持って来ず、払うところで、いきなり困ったので、友達に部分的にお金を出してもらう様な場合も別です。しかし、基本的に、自分が食べたり、飲んだりした分は、他人と関係の無いことであり、違う言葉で言えば、必要ではない時に、知り合いであっても親友であっても、とにかくその人の負担になりたくない、つまり人間関係に不要の負担を掛けたくないという気持ちが、ドイツ人の常識の一つであるかも知れません。他の人よりたくさん食べたり、飲んだりしたのに、同じ金額しか払わないのは、おかしいと思われ、相手が腹を立

ててしまうかも知れません。人にたかる(=寄食する)甘えん坊として嫌われて、顰蹙を買うことさえ有り得ます。その上に多分一般的に言えるのは、ドイツ人は中途半端なことが余り好きではないということです。人の分まで払う場合、ドイツ人なら、やっぱりちゃんと(つまり完全に)奢ることが普通です。

私が初めて来日した時、必死にノートしていた毎日のいつでしたか、突然、いつもずっと使っていたボールペンが書けなくなりました。それはつまらない故障で、ご想像できますように、つまり芯の中身を使い果たしたことだけでした。という訳で、私は、いつもの通り、芯を買いに行きました。しかし、それは意外に冒険になりました。まず最初に、いろいろな小さな店で、「芯は置いていない」と、生まれて初めて言われました。そして、やっとデパートで芯を見つけましたが、びっくりするほど高価でした。思い出すのも悔しいですが、隣に置いてあった新しい丸ごとのボールペンよりさえ高かったのです。悔しい思いをしながら、やっぱりペンではなく、芯にした私は店員さんに珍しがられてしまいました。芯がだめになったという訳だけで、大事にしてきたペンを捨てるつもりが全く無かったので、仕方がないと思って、その芯を買いましたが、日本ではほとんど芯を買う人がいないようなので、ずっと店に置いてあったのでしょうか、とにかく、結局その芯は、あんなに高かったのに、古くて乾燥していて品質が悪かったとしか言えません。

現在の日本人の大多数は、何かを可愛いと思っても、全く愛着を知らないと言えるでしょう。そのような人は、さっきまで可愛がっていたのに、物であっても、人間であっても、何か面倒臭いことが起こりますと、すぐにもう捨ててしまいます。それは大変心配すべき現象です。なぜなら、その様な人間は自分だけを優先して、悪意が無い場合さえ、容赦せずに自分の周辺を破壊するからです。しかし、私がそれをドイツと日本の違うところの一つとして述べようとしている、という誤解をなさらないで下さい。昔の日本人も物を大事にしました。現在でも、もちろんそのような日本人が、まだたくさんいらっしゃいます。例えば、私のことを、初めて来日した、まだ拙い日本語しかしゃべられなかつ

た頃から今までずっと、可愛がって下さり、世話してきて下さった方々は何方も、有り触れた日常品さえ大切に使われるだけではなく、小さくて平凡なものも見下さないその態度で、日本の文化そのものを守っていらっしゃる、偉い方々ばかりです。あの尊敬するしかない方々のお陰で、私の日本への愛情がずっと高まってきました。

日常生活の不要な贅沢の例の一つとして包み紙を挙げれば、日本では何でもかんでも余分に包んでしまう習慣がありますね。勿体ないと思われたことがありますか。普通に何処でも使われている包み紙がとても丈夫なので、三回使っても、大丈夫です。お金が充分にあるという訳だけで、新しい包み紙を使わないと、恥ずかしいというのは、私はおかしいと思います。我々皆が明日から暮らさなければならない環境を、今日のことしか考えていない人が容赦のない使い捨てで破壊することは、どうしても許されない態度だと思うしかありません。

鹿児島で初めて辛夷の木を見た時、丁度一緒にいた友達に「あちらに咲いているのは木蓮じゃありませんか。」と聞きましたが、「いや、違いますよ。それは木蓮ではありません。」と言われました。確かに、木蓮が咲いている時期には、ちょっと外れていた上に、花と一緒に葉も出ていることが、ちょっと不思議だと思いました。しかし私は、花びら、花の形、葉、木の形、木の皮を見て、やっぱり木蓮だと思うことしかできませんでした。友達が後で調べてくれたようですが、私にある写真を見せながら「この間の奴はこれではなかったですか。」と言いましたが、良く見たら、確かにその通りでした。⁶⁾「それはね、辛夷だそうです。」と友達が言いました。私は、それはドイツ語で一体にどういう木だろうか、という疑問で一杯になり、早速、和独辞典で調べてみました。それで、びっくりしました。なぜなら、木蓮の一種だと書いてあったからです。⁷⁾つまり、ドイツ語では木蓮が「Magnolie」で、辛夷が「Kobusmagnolie」です。

⁶⁾ 『山溪カラー名鑑・日本の樹木』、林弥栄編、山と溪谷社 1987年、194/195頁参照

⁷⁾ 『現代和独辞典』、ロベルト シンチンゲル・山本明・南原実編、三修社、第160版 1999年、586頁参照

私は、その二つの種類がいわば親戚なのに、日本語で全く違う名前が付いているということで驚きました。⁸⁾ そして、親類である木に日本語では意外な別名が付いているということに関連して、とても気になったことがもう一つありました。それは、私は辛夷が木蓮にあんなに似ていると思っているのに、日本の友達が、やっぱりとても違う、という判断を出したことでした。実は、その現象は植物の世界に限られていません。

日本語では、ご存知の通り、いわゆる出世魚が存在します。有名な例を挙げますと、可愛いオボコだった魚がイナ、そしてボラになり、そしてやっとトドでおしまいだということですね。そして、例えば、ブリを考えると、ツバス、ハマチ、メジロ、ブリの順で、成長に連れ、呼び名が変わります。⁹⁾ 特にその今述べた二つの例で、同じ魚に、成長によって違う名前を付けるということが、ほとんどの日本人にまだ十分に意識されていると思われます。(が、大きな声で少し言い難いですが、若い学生の皆さんにも、まだその意識があるかどうか、とちょっと疑っていることは否定できません。) しかし、例えば、ブリを話のきっかけにしますと、混乱しやすいことになります。アジ、カンパチ、そしてブリは、例えば大辞林という辞典によって、親類として認められ、アジの項目に載っていますが、¹⁰⁾ 普通の日本人は、それがやっぱり全く違う魚だという判断をしますし、その魚達の完全に異なっている名前も、そのような考え方を表しています。そういう訳で、ドイツ人にとっての、例えばサバとアジが親戚であるという意識が、日本人に受け止めてもらえるはずもありません。どうしてその様な考え方の違いが起こるのでしょうか。

哲学の国という評判を持っているドイツの住民は、相変わらず抽象的な考え

⁸⁾ それは、「Magnolie」という木が元々ドイツの木ではなかったからだ、とある日本人に言われましたが、しかし昔からドイツにも存在している植物、例えばKohl (キャベツ、種類がドイツにはものすごくたくさんあります) や Eiche (樺、柏、榎、オーク) などなどの場合にも、抽象的な考え方に基づいている名前の付け方が目立つ上に、それは、以下に述べるように、植物の世界に限られていない現象でもあります。

⁹⁾ 『広辞苑』、新村出編、岩波書店、第五版 1999年、2365頁参照

¹⁰⁾ 『大辞林』、松村明編、三省堂、第二版 1995年、CD-ROM版 1997年
又は、『広辞苑』、新村出編、岩波書店、第五版 1999年、614頁も参照

方を優先しがちで、アジやサバやサンマやサワラなどの共通点を考えますと、やっぱり、どちらでも Makrele だという判断をするしかないようです。しかし、一つずつ具体的に別々に見つめがちの、つまり異なるところにこだわっている日本人にとっては、それは当然ながらとても納得できない判断です。既に述べた木蓮と辛夷の問題と全く同じような現象ですね。そういう訳で、「ドイツ人にはやっぱり魚に関して余り関心がないようですね。」と日本の友達に言われたことがあります。実は、そういうふうと言われて、私はとても悔しい思いをしておりました。なぜなら、ドイツ人はビールとソーセージばかりだと思い込んでいる日本人には、知られていないことでは、少なくとも伝統的なドイツ料理をちゃんと守っているドイツの家では、魚料理がとても大事にされているのです。その理由は、大体海が遠くて、魚が、日本と比べて、ずっと手に入り難い物であるからです。だからこそ、川と湖の魚もとても大事にしています。魚の臭みが苦手な私の祖母さえ、少なくとも毎週一回、魚料理を作ってくれました。

ドイツで一番良く知られている人気の魚は、例えば Karpfen (コイ), Hering (ニシン), Seelachs (サケまたはマスまたは北欧産のタラの類), Hecht (カワカマス), Forelle (カワマスまたはイワナ), Scholle (カレイ), Kabeljau (タラ), Dorsch (大タラ), Aal (ウナギまたはアナゴまたはハモなど), Makrele (サバまたはアジまたはサンマまたはサワラなど), Sardine (イワシ), Heilbutt (オヒョウ), Barsch (ペルカ, スズキに似た淡水魚) などです。

ご覧の通り、多くの場合、ドイツ語での一つの魚の名前で、いろいろな日本語での魚の名前が統合されていることが、これだけの例で分かります。それは、ドイツ人が、日本人と比べて、魚の異なっているところより、共通点になるところにこだわっていることを表していると考えられます。実は、その違いに隠れている一番大事な秘密の一つが、調理方法だと、私は思っております。海が遠いというドイツ人のほとんどにとっては、昔から生魚をそのまま使った料理は、あり得ない料理でした。つまり、ドイツで魚を生で買っても、昔から、しっかりと煮込んだり焼いたりするか、または最初から生魚を塩漬、または酢漬

けとして買うか、ということでした。その様な調理法のお陰で、もうあまり新鮮でない魚を美味しく食べても、危険でもないし、長持ちもします。しかし、丁度その様な調理法のせいで、生魚なら区別できる魚の微妙な違いが分からなくなり、却って類の一般性の味が分かってくる、と魚大好きな私は思っております。つまり、ドイツ人には魚に関して余り関心がないというより、海に恵まれた日本人と違って、新鮮な魚が手に入り難いので、昔からいろいろと調理に工夫しなければならなかったのです。それで、新鮮な魚を生でさえ、いつでも楽しめる日本人と違って、生魚の微妙な違いより、類の一般性に注目したことは、理の当然だと言えます。ドイツはビールとソーセージばかりだという間違っているイメージを変えてみませんか。ドイツの昔から一生懸命に工夫された、伝統的な魚料理も見下さないようにお勧め致します。一遍じっくりと挑戦してみて下さいますと嬉しく思います。

文化の違いを表す、論究のきっかけとして相応しい他の例は限りなく浮かんで来るでしょうが、今回はこれで考察を終わらせて頂きます。国際的な社会を目指している我々は皆、日常生活の問題が、文化によって異なった方法で解決されようとしていることを、つまり無条件で絶対の正解が存在しないことを、違う文化に根ざしている人々と触れ合いながら、たびたび発見できます。ドイツに生まれて育ち、日本で暮らしている私には、どっちの方が良いかと言うつもりはありません。国によって違う現実の条件に基づいて、それぞれの問題一つずつのなるべく良い解決方法を探すべきだと思います。二つの文化的な世界の間での私の生活は、いろいろな面でとても大変ですが、面白い発見に溢れています。しかし、個人だけとして、生きていられない人間には、社会の一部として責任があります。そういう訳で、例えば、上に述べた様な経験や発見などを、なるべく多くの人と話し合い、皆一緒に考えることは、我々皆がこれから行く方向を決めるために必要だと思います。偉そうに聞こえるかも知れませんが、私が二つの文化の間でできた経験を、自分の第二の故郷になってきた日本のためにも、次の世代のためにも、生かすことが、私の大事な課題の一つであ

ると思っております。この文章が、考えたり、話し合ったり、議論でもしたりなされる刺激になれば、それを光栄と思うことはさて置き、少しでもお互いにもっと理解できるためにも役に立ちましたら、とても嬉しく思います。

参考文献：

- 『大辞林』，松村明編，三省堂，第二版 1995年，CD-ROM版 1997年
『広辞苑』，新村出編，岩波書店，第五版 1999年
『新現代独和辞典』，ロベルト シンチンゲル・山本明・南原実編，三修社，第一版 1997年
『現代和独辞典』，ロベルト シンチンゲル・山本明・南原実編，三修社，第160版 1999年
『魚類図鑑・南日本の沿岸魚』，益田一・荒賀忠一・吉野哲夫著，東海大学出版会 1975年
『山溪カラー名鑑・日本の樹木』，林弥栄編，山と溪谷社 1987年
「靴？履？」，森鷗外著，『鷗外全集』に収録，岩波書店 1974年，第29巻，141-153頁
『日本文学史序説』，加藤周一著，『加藤周一著作集』に収録，第4,5巻（=上，下），平凡社 1979年
「Die Wahrheit über Japan」，森鷗外著（Allgemeine Zeitung Nr.360, 29.12.1886），『鷗外全集』に収録，岩波書店 1974年，第26巻，3-12頁（=620-611頁）
「Noch einmal „Die Wahrheit über Japan“」，森鷗外著，（Allgemeine Zeitung Nr.360, 1.2.1887），『鷗外全集』に収録，岩波書店 1974年，第26巻，12-19頁（=610-605頁）